

## 人肉食 Cannibalism

ニューギニアでの捏造に、人肉食があった。昔々、南洋には人喰い人種がいて髑髏をいくつも腰にぶらさげている絵がよく少年雑誌などに載っていた。100年以上前(明治初期)に台湾でも首狩り族がいたことが写真に残っている。

日本では、天明天保の大飢饉の際、多くの餓死者がでたが、人肉食の記録はないようである。日本人固有の性質によるものかも知れない。

第二次世界大戦のさなか、陸軍はとくに食糧不足に悩まされた。海軍はともかく、陸軍では、秦教授だったか、戦死者のうち4割が広義の餓死者だという人もいるくらいである。で、人肉食があったかどうかについてはよくわからない。大岡昇平さんの小説では、サル肉の肉とって、人肉食があったかのような表現がでてくるが、真偽は不明である。ニューギニアでは、日本軍人としてたとえ飢えてもそんなことをするはずがない、という人もいる。食べられる物なら何でも食べた。木の根、草の葉、生きた猪や鹿などがあれば大変なご馳走であるが、獲り尽くしたら何でも食べているはずで、芋虫の類も食べたという。日常では食べない物やゲテモノを食べる人以外食べることがないような物も食べたという。

一方、中国人や欧米人にはあまり違和感がないらしい。文化大革命のとき、肝臓などを分け合って食べたというし、項羽のような勇者の肝を食べると自分も勇者になれる、という言い伝えがあつて、取り合いになったという。もともと中国には、人肉食の伝統がある。斉の桓公があるとき、今までに食べたことの無い物を要求した。すると、料理人の易牙はわが子を蒸し焼きにして供した、というから、人肉食に違和感はないらしい。易牙は料理の神様で、中華街などに肖像画が祭られている。

中国医学の解剖図譜は、いかにも稚拙で、明治以降に欧米から入ってきた医学に取って代わられた。しかし、図譜がいい加減だからといって解剖を知らないわけがない。どの部分が旨いか知り尽くしているはずである。また鍼治療で、どの箇所を刺せばどの臓器が反応するか確かめているはずで、しかも生きた状態である。

2014年8月の週刊誌に、「人肉入りのカプセル」が売られていたという記事があった。その以前には、寄生虫入りのキムチを作っていたともいう。

肉食の欧米諸国でも、現在では人肉食はないだろう。40年ほど前に、アンデス山脈に飛行機が墜落。1ヶ月以上かけての大掛かりな捜索の結果、12人(16人?)が生

きて「元気で」発見され、救出された。よかったよかった、ですむところ、こういう時に「変に冷静なヤツ」がいて、「水は雪を溶かして飲めばいいが、彼らは何を食べていたんだ」となって人肉食が発覚した。発見されたときには、姓名も公表したが、その後は匿名。議論を呼んで、すったもんだの末に「究極の選択」ということで、攻撃されることはなかった。ボクの場合では、責める必要はぜんぜんないと思うけどなあ。

エドガー・アラン・ポーが1837年に発表した小説 *The Story of Arthur Gordon Prim* の中に、船が転覆し、ボートで漂流していた4人の男がいた。いよいよ食べるものがなくなって極限状態になった。そこで籤を引いて、当たった者を殺し、その肉を食べることにした。その犠牲者となったのがキャビン・ボーイのリチャード・パーカーであった、という話である。

1884年、この小説とまったく同じ状況になった。こちらは実話である。小説のこともみんな知らない。このときにも籤を引いて当たった者を食べるようになった。その被害者の名前がリチャード・パーカー。

さらに、この「小説」と「実際にあった事故」とを文献で発見したのが、ニジェル・パーカー。リチャード・パーカーの従兄弟の孫であった。

この話などは、「タイタニック号の沈没」などと同じく、心霊現象の稿で書くべきものかも知れないが、要するに、究極の選択として選ばなければならないときには、人肉食もやむを得ない、ということである。(ボクには無理ですが。)

こういう極限に至れば、冷静な判断をせよ、という方に無理がある。戦争小説の古山高麗雄さんは、戦地で「死ぬ」と決めてもやはり爆弾が炸裂すると震える、という、決意と裏腹な行動をとると、体験談を笑い話のように語る。こういう人のほうがよほどに信用できる。戦争は、悲惨なばかりでなく、勇ましい話も情けない話ある。全部ひっくるめて「体験」「学習」であるとおっしゃる。

1999.05.31.

日付のごとく、15年前に書いたものです。